

高島・白石島探訪記

柳原輝明

2004年8月、岡山県の瀬戸内海に浮かぶ小島、高島のイワクラを渡辺会長と二人で探訪した。JR笠岡駅に着くと高島の藪田さんがにこやかに出迎えてくれた。笠岡駅から高島に渡る連絡船の乗り場まではわずか5分程度の距離である。12時40分発の連絡船に乗り一路高島に向う。高島港を出ると右手に神島が見え、その名のとおり円錐状の美しい小島である。現在は地続きになってしまっており、島には西国八十八箇所のお寺が祀られているそうである。30分程度であったが、波は比較的穏やかで快適な船旅であった。

高島の栈橋についた後、栈橋のすぐ裏山にある子妊石を探索した。その岩そのものが持つ奇怪な姿に圧倒され、土台石との接合部分の見事な仕口をはしごを使って見せてもらった。自然の造詣とは思えない人工的な組み方に感心した。また、この岩の位置そのものが島の西端の山頂部にあり、近くを航行する船の見張り台として真に適した場所にある。偶然にこの位置に岩があつたというより、見張り台あるいは航行する船の灯台としての役割のため人工的にこの場所におかれたように見える。藪田さんの話では、自分の子供の頃この石に牡蠣殻がついていた事を覚えているということ、この岩が海中に長くあつた事が想像される。岩の形状も、風化によるというより激しい波により浸食を受けて形成されたもののように見える。これらの事を総合的に見れば、この子妊岩は、人工的に設置されたもので、まさしく古代人の文明の痕跡であるように思える。このあと、

島内の他のイワクラを探訪したが、何れもが古代の巨石文明を髣髴とさせるものばかりであつた。これらについては、別項の「高島のイワクラ」に詳しく述べられてあるので参照していただきたい。

あくる朝、8時26分の連絡船で隣の白石島に渡った。わずか10分程度で到着。栈橋を出て振り返るとすぐそばの山の頂上に巨大な岩陰があつた。御国岩である。五階建てのビルに匹敵するほどの巨大さである。この山一帯には巨大な岩があつて、それぞれの岩に西国めぐりの札がつけられ祀られているそうである。今回は、この部分を後回しにして、巨大なドルメンの存在する「開龍寺」に向う事にした。ひなびた漁村を辿る事20分。はるか前方に三角形の岩山

が見える。目を凝らしてみると、山の稜線の上に岩をピラミッド状に積み上げてあるように見える。



写真：ピラミッド状岩山

姿、形はピラミッドそのものである。会長は早くその場所に行こうとして急ぎ足になったが、順番として開龍寺のドルメンから見えて

かないと時間的に無駄が大きいと判断し、逸る心を抑えて先ずは開龍寺を訪れた。

石の鳥居を抜けて境内を進むと右手に巨岩に隠れるように小さな祠が建てられている。永護神社というこの小さな神社は、源平合戦の戦死者を祀るものである。言い伝えでは、神社の脇の巨岩に武士の姿がうつすらと浮かんでいたそうで、戦死者の思いがこの岩に映し出されているという。



写真：開龍寺奥の院

さらに進むと、開龍寺の奥の院に到達する。この寺は弘法大師が

大同元年(806年)に唐の国より帰朝の途中寄港し島の人々に徳を施し、島を去るに当たり一寸八分の尊像を刻まれ島に残された。島の人々は尊像を二本尊として太子堂を建立、神島に八十八ヶ所を開いて、ここを奥の院根本道場とした。(白石島パンフレットより)

写真からも判るように、これは巨大なドルメンの下部空間にお堂を築いたものと思われる。お堂の上部の巨石は間口6m、奥行き7m以上、高さは1m程度の平たい巨石である。背後に見える巨大な岩を拝むための場所であったと思われる。

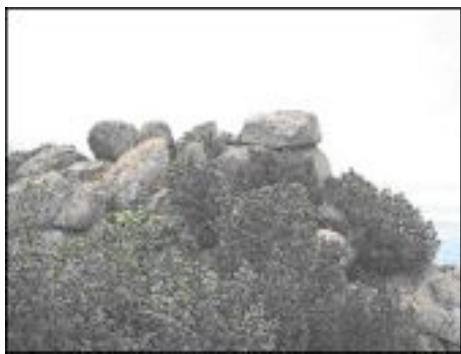
開龍寺の境内を鳥居のところまで戻り、そこから南のほうに細い山道を辿る事15分、先ほどの漁村から遠望したピラミッド状の岩山の麓に到着した。そこから山道に沿って約200m、標高40mから80mに昇ったところがちょうど岩山の足元であった。そこから山頂までは標高差約50m、山肌には設けられた1m程度の階段に

沿って一気に駆け上がる。途中、休憩のため立ち止まると、岩山のため一木一草もなく、はるか下の方まで見渡せ、高所恐怖症の間には相当の恐怖を与える光景である。

頂上まではもう少しである。5分ほど昇ったところに地元のパンフレット等に紹介されている鎧岩があった。パンフレットによれば、地質時代に花崗岩を貫いて噴出した、アンプライトの岩脈で、縦横の節理が基盤の目のように正しく、地質学上貴重なもので天然記念物に指定され、鎧の直垂に似ていることからこの名がある、と記されている。

地質学的説明はこのとおりであるが、なぜこのような岩脈の部分が表面に出てきたのかという説明がされていない。このような岩脈が花崗岩に刻まれているのは、奈良県の山添にある巨石で見たことがあるが、その岩脈部分が表面に見えるのは珍しいのではないかとあえて推理すれば、この節理面の上部の岩が下部に滑り落ちてなく

なったのか、ピラミッド状に積み上げる素材として、たまたまこのような岩を積み上げたのかどちらかであろう。先の、節理面上部の石が自然に滑り落ちたとするにはその節理面はあまり勾配を持っていない。即ち自然に上部が滑り落ちてなくなったとは考えにくいであろうか。地質の専門家にこの点について確認したいと考えている。



写真：ピラミッド状岩山頂上

鎧岩を過ぎるとすぐに頂上である。頂上部は岩でサークル状に囲まれやや平坦になっている。この部分からは360度の遠景が楽し

める。頂上から南西の方向に10m程度下るとこのピラミッド状の岩山を支えている稜線に到達する。逆に稜線側から見ると、稜線の先端に三角状に岩を積み上げてあるように見える。

この稜線を辿って北西の方向に行くくと巨大な大玉岩に到達する。直径7〜8mの球形の岩であり、その背部には修験者のためのものか鎖があり、その上部に登れるようになっている。その下部には小さな祠があり、修験者がこもって修行する場があった。この岩も、稜線から10m程度小高くなった部分に置かれてあり、自然のものというより展望台あるいは灯台としての役割を持っているように思える。

この大玉石の北側の小道を東のほうに下っていくと丸い巨石の下から清水の湧き出している「まない」があり、それを過ぎると開龍寺の奥の院の横に出た。朝来た道を通り船着場に戻ると、地元公民館の天野さんという人に出会うことが出来、白石島の巨石について

の話伺うとともに、天野さん所有の巨石写真を頂いた。それが巻末の写真であるが、圧倒的な迫力を持つ巨石に感激し、是非もう一度訪れたいと切に思った。

今回、高島の藪田さんからの要請ということで偶然瀬戸内海の島に浮かぶ小島にこのようなすばらしいイワクラ群が眠っていた事を発見できて幸いであった。特に、白石島のピラミッド状の岩山は、日本に存在していると言われる人工ピラミッドそのものではないかと想像し、わくわくしている。地元のパンフレットではまったくそれに触れられておらず、あの岩山が人工のものと想像することは考えの外ということなのだろう。

今後、この岩山が人工の物かどうかを、古地磁気学の技術を活用して解き明かす事が出来ればと思っている。

イワクラ学会会報

【白石島 天野正様提供写真】



写真：うるめ岩



写真：かめ岩



写真：興国岩



写真：平田



写真：どんび岩



写真：鏡岩



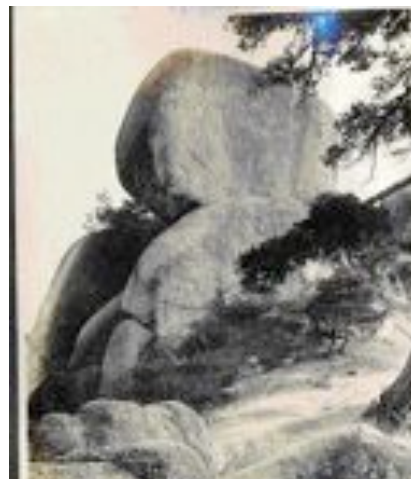
写真：鎮壊岩



写真：眞名井



写真：小山



写真：磐鏡